

日韓の夫婦間の呼びかけ表現： 先行研究の問題点と今後の展望

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17082

日韓の夫婦間の呼びかけ表現 — 先行研究の問題点と今後の展望 —

人間社会環境研究科研究生 尹 秀美（ウン・スウミ）*

<概要>

夫婦はお互いに相手のことをどう呼んでいるのであろうか。日本人夫婦と韓国人夫婦の直接的な呼びかけ表現を扱った先行研究を調査し、それらを年齢と場面という観点から整理した。その結果、両国の夫婦とも多様な呼びかけ表現を使っていることと、年齢や場面が呼びかけ表現の選択に影響を与えていることが確認された。しかし、先行研究にはいくつかの共通する問題点も認められた。まず、取り上げた先行研究は全てアンケート調査という方法を用いているが、地域や学歴といった、呼びかけ表現の選択に影響を与える社会的要因が考慮されていない。したがって、今後の研究は、呼びかけ表現の選択に関わる社会的要因を拡大し、両者の適切な相関関係が得られるようにする必要がある。また、呼びかけ表現は、場面の変化によっても異なることがあるが、それはほとんど調査されていない。そこで、社会的・心理的要因の変化に対応する場面に応じた調査も今後の重要な課題となる。

<キーワード>

呼びかけ表現、夫婦、日本語、韓国語

* E-mail: smy8005@hotmail.com

<目次>

1. 序論

- 1.1 研究目的
- 1.2 調査方法

2. 本論

- 2.1 日本の夫婦の呼びかけ
 - 2.1.1 年齢別
 - 2.1.2 場面別
- 2.2 韓国人の夫婦の呼びかけ
 - 2.2.1 年齢別
 - 2.2.2 場面別

3. 結論

- 3.1 先行研究の限界
- 3.2 今後の研究課題

文献

1. 序論

1.1 研究目的

呼称表現はコミュニケーション行動においてとても重要な役割を果たしている。なぜなら、参加者同士の社会的・心理的距離がそこに現れ、またその表現を適切に使用することによって、相手との距離を調節したり、第三者に対して関係がどのようなものであるかを提示できるからだ。このような呼称表現には言及表現と呼びかけ表現の二つの側面がある。前者の例としては、他人に自分の夫のことを話す時、話し相手が目上の人であるかどうかによって「主人」や「だんな」というように使い分けることが挙げられる。そして、後者の例としては、普段自分の夫を「〇〇ちゃん」と呼ぶ人が、子供と一緒にいる場合は「お父さん」と、また口論中には「あなた」と呼ぶことが挙げられる。その夫は自分の妻にいつもの呼称である「〇〇ちゃん」ではなく「あなた」と呼ばれた時には、妻の機嫌が悪いと感じ取るかもしれない。特に夫婦間の呼びかけ行動は殆ど毎日行なわれており、ある特定の呼びかけ表現が習慣になる可能性が高いが、日本人と韓国人の夫婦は場面によって異なる呼称表現を使い分けている。

このように、日本人と韓国人が夫婦間の呼称表現を場面ごとに使い分ける原因はどこにあるのか。従来の研究では、第三者に夫や妻について話す時の呼称に注目しており、自分と配偶者と第三者との上下親疎にその原因があることがある程度明らかになった。ところが、話し相手の行動を調節する機能をもつという点で、直接的な呼びかけ表現は極めて重要な対象であるにもかかわらず、今まであまり関心が向かれてこなかった。

日本語と韓国語の呼びかけ表現はその種類がとてもバラエティーに富み、両国では呼びかけ表現を選択する際、常に悩む。上でも夫婦の呼称表現を例に取り上げたが、アメリカの映画に登場する夫婦を見ると、お互いを名前で呼び合うのが普通である。しかし、日本や韓国の映画の中の夫婦は場面ごとに呼びかけ表現が異なると言っても過言ではないくらい多様である。そして、日本語と韓国語の夫婦の呼びかけ表現の共通点は、時代による変化と場面による変化を挙げることができる。

近年、日本と韓国で共通する社会的現象の一つとして、女性の社会的地位の漸次的上昇を挙げることができる。女性も、男性と同等な教育を受けるようになり、女性の就業率も増加し、経済的独立が可能になった。それに従い、日韓両国での夫婦関係にも変化が見られるようになった。その変化は夫婦間の呼びかけ表現の使用にも影響を与えていたようである。例えば、日本の若

い夫婦同士は伝統的な呼び方である「お前」と「あなた」の代わりに、お互に名前で呼び合うことが多くなった。一方、韓国では昔からの「여보 (yeobo) ; [夫婦が呼び合う語]」¹や「당신 (dangsin) [夫婦の間で相手を指す語]」の代わりに、結婚する前の恋愛時代の呼び方を使う。つまり妻は自分より年上の夫に対して親族系の「兄」を表す呼び方「오빠 (oppa)」を、夫は妻に対しては名前を使って呼ぶ夫婦が増えてきている。

本稿の目的は、①今までの先行研究に基づいて、日本と韓国の夫婦間の呼びかけ表現を年齢と場面による変異という視点から整理することによって、先行研究の問題点を探り、②今後の研究の可能性を展望することにある。

1.2 調査方法

本稿は日韓の夫婦間の呼びかけに関する展望論文であるため、まず、従来の先行研究に基づいてその成果を日本人の夫婦と韓国人の夫婦に分けてまとめる。次に両国の夫婦間の呼びかけを年齢と場面といった視点から整理する。調査対象となる先行研究は日本の夫婦間の呼びかけを扱った米田(1986)と韓国の夫婦を対象とした이 옥련 [Yi-Ockryon](1987)と日韓両国を比較した韓先熙 (1994, 1996)、이 용덕 [Yi-Yongduk](1998)、홍민표 [Hong-Minpyo](1999)である。これらの研究全てが年齢と場面ごとの呼びかけ表現の変異を同時に調査しているわけではなく、年齢別調査だけを行った研究もあれば場面別調査だけを行ったものもある。そこで、各研究の中で関係する部分を取り上げる。

2. 本論

2.1 日本人の夫婦の呼びかけ

日本の夫婦はお互いどう呼び合っているのであろうか。本節では日本の夫婦が実際どう呼び合っているのか、またその呼びかけは年齢や場面ごとにどう変わるのであるのかを先行研究に基づいてまとめる。

2.1.1 年齢別

話者の年齢が言語使用と相互に関係を持っているのは事実である。日本人の夫婦がお互い相手を直接呼ぶ時の表現を年齢別に調査した研究に、이 용덕 (1998)がある。李庸惠は福岡県大木町の 60軒の家庭を対象に 1994

¹ 民衆書林編集局『NEWポータブル日韓・韓日辞典』(三修社, 2004) を参照。以下、本文中の韓国語呼びかけ言葉の説明はこれを参考にしている。

年10月から1994年12月まで直接調査を行った。

이용덕の結果をみると、日本人の夫婦は名前、応答詞（「おい」「ねー」「ちょっと」となど）、親族名詞（「お父さん、お母さん」など）、代名詞（「あなた」「お前」など）など様々な言葉でお互いに相手を呼んでいることが分かる。特に親族名詞をみると、自分の配偶者を子供の視点から呼ぶ傾向があつて、その中でも「お父さん」と「お母さん」という言葉が圧倒的に多い。

年齢別に見たときに目立つ特徴は、60代以上の夫婦の間では、相手を「じいちゃん」や「ばあちゃん」と呼んでいる人がいるということである。それは50代以下の若い夫婦の間では全く見られない。また、20代や30代のような若い夫婦は配偶者を「お父さん」や「お母さん」のような親族名詞と共に、「名前」「名前+さん」「名前+ちゃん」のように名前を使って呼んでいる人も多い。このような結果から 이용덕は日本人の夫婦は様々な呼称で相手を呼んでいるが、特に家庭の中の最年少者の視点での親族名詞で呼ぶのが、一般的な呼称の傾向であると推測している。

しかし、この調査の結果だけで、日本の全般的な傾向を示すことには少し無理があろう。言い換れば、1994年ごろの日本全国の夫婦が必ずしもこのように呼び合っていたとは言えないのだ。これは日本のある町の傾向とは言えるが、日本の全体的な傾向ではない。言葉は様々な要因によって異なり、地域もその主な要因の一つだからである。そしてもう一つこの調査で疑問に感じられることは、調査対象となった夫婦の数である。年齢別に多く使われている呼称を調べる際に、必ず整えられる必要のある年齢別調査対象者数にかなりバラツキが見られるのである。이용덕の調査対象は40代の数が83名で一番多い反面、70代以上が21名で20代は11名である。最近20代を過ぎて結婚をする人が増えるなど、現実的に中年の夫婦より若い夫婦の数が少ないので事実であろうが、特にその種類が多様な呼称の調査においては対象者数を同数にするよう調整したうえで調査を行うべきである。人数が多いほど呼称のバリエーションが多くなるのは当然のことであるからだ。

2.1.2 場面別

それぞれの話し手は、日常生活の多様な場面に対応して、その場面にもつともふさわしい言葉を選択する。それは、話し手が違ったら当然のことであろうが、もし相手が同じ人物でも、目下接している場面によって変わることもある。実際日本の夫婦の呼称もその場面によって様々な形で現れる。ここでは、子供がいる場面といない場面、通常の場面と口論中の場面で用いられ

る夫婦の呼称の表現を先行研究に基づいてまとめる。

米田（1986）とホンミンヨ（1999）は日本の夫婦の呼称を二人だけでいる場合と子供の前という二つの場面に分けてアンケート法で調べた。二つの研究とも年齢差は考慮されていない。米田は1986年5月に首都圏に住む夫婦185組を調査対象とした。対象の中には特に私立女子大学生の両親や朝日カルチャーセンターの受講生とその夫が含まれていた。ホンミンヨは1998年11月から1999年5月まで日本人262名を対象にアンケート調査を行った。対象となる人々の居住地は東京、大阪、北九州の3地域でその比率はそれぞれ13.9%、69.2%、16.9%である。また、調査に応じた妻の職業は主に専業主婦や公務員が多い。洪珉杓は子供がいる夫婦だけを対象にしている。従ってここでは、米田の結果のうち子供がいる夫婦の場合だけを取り上げることにする。

まず米田（1986）によると、妻が夫を呼ぶ時一番多く使う呼称は二人だけの場面と子供がいる場面とともに「おとうさん」が一番多い。しかしその比率はかなり違って、二人だけの場面では27.1%、子どもがいる場面では44.1%である。そして次に二人だけの場面で多いのは「ねえ、ちょっと」という応答詞（22.2%）である半面、子どものいる場面では子供の視点からの呼称である「パパ」（27.1%）である。これを見ると確かに子供の有無は夫婦の間の呼称にかなり影響を与えていているようである。子供の前では親族名称が多く使われている。それは夫が妻を呼ぶ時にも当てはまり、二人だけの場合は妻を名前だけで呼んでいると答えた人が24.6%で一番多く、「おかあさん」と呼んでいると答えた人は16.1%である。ところが子供の前では名前だけで呼ぶと答えた人はわずか13.6%で「おかあさん」と呼ぶ人が33.1%で一番多くなり、逆転の現象が見られる。

ホンミンヨ（1999）の結果も同じ傾向を表している。妻が夫を呼ぶ時、二人だけの場合であれ子供がいる場合であれもっとも多く使われているのは「おとうさん」であるが、その比率は55.4%と77.7%でかなりの差がある。夫が妻を呼ぶ時は米田の結果と少し違って子供の有無に関係なく「おかあさん」がもっとも多く使われているが、その比率は妻の場合と同じく二人だけの場合24.8%から子供がいると46.9%に増加する。

米田（1986）とホンミンヨ（1999）の調査がほぼ同じ結果を表していることから、夫婦の呼称は二人だけの場合と子供がいる場合によってそれぞれ異なり、子供がいる場面では「おとうさん」や「おかあさん」のような、子供が自分の両親を呼ぶ時の親族名詞を使う傾向がある事がある程度予測できる。だからといって、これが現実を反映しているとは限らない。両研究ともある特定の地域で主にある特定の職業の人を対象に調査をし、それが日本の全体的傾向

ではないかと述べているが、もし多数の地域の多様な職業を持つ人を対象にこのような調査を行えば、異なる結果が出たり両研究では全く扱われていなかった新しい言葉で自分の配偶者を呼んでいたりする地域があるかもしれない。そして夫婦や子供の年齢の考慮も必要であろう。例えば子供が幼稚園生かまたは大学生かによって十分異なる呼称が選べるからである。

*

米田（1986）では、さらに口論中に自分の配偶者をどう呼ぶかも調査されている。その結果は、対称代名詞（妻：44%、夫：48%）、名前（妻：20%、夫：18%）、父称または母称（妻：18%、夫：5%）で、対称代名詞の割合が顕著に多くなっている。具体的には妻が使うのは「あなた」がほとんどで、夫の場合は「おまえ（32%）」「あんた（9%）」「きみ（6%）」などが含まれている。

夫婦が口論中になぜ相手を対称代名詞で呼ぶのである。なぜ妻はほとんど「あなた」だけなのに、夫の場合はいろんなバリエーションが現れるのである。米田はこのような疑問点について考察していない。日本語母語者ではない筆者はむしろ子供がいる場合といない場合の呼称の違いはある程度理解ができたものの、口論中に夫婦とも主に対称代名詞を使うという結果に違和感を覚え、興味を持った。

2.2 韓国人の夫婦の呼びかけ

本節では韓国人の夫婦がお互いに相手をどう呼ぶのかを先行研究に基づいてまとめる。韓国人の夫婦も年齢や場面などによって様々な呼称を使っているので、日本人の夫婦の場合と同じく年齢別と場面別に分けて述べることにする。

2.2.1 年齢別

韓国の夫婦の呼称を年齢別に調査した研究は、이옥련（1987）と韓先熙（1994, 1996）と前章で扱った이용덕（1998）がある。

이옥련（1987）は1986年9月から11月まで韓国の仁川・京畿道・光明市・松炭市・ソウルに住んでいる20代から60代の夫婦を対象にアンケート調査を行い、その結果を年齢別に考察している。이옥련によると韓国の20代の夫婦間の呼称の特徴は、妻を呼ぶ言葉は「여보（yeobo）」が代表的呼称で、夫を呼ぶ言葉は「자기（jagi）；〔もともと再帰代名詞が二人称に転じ、さらにまた呼称になったものである〕」と「名前+外（ssi）；〔日本語の「さん」のように相手を呼ぶ時名前の後ろに付けるが、日本の「さん」とはその

使いに少し違いがある]」が代表的である。30代は妻を呼ぶ時「여보(yeobo)」と「子供の名前+엄마(eomma)；ママ」、夫を呼ぶ時「子供の名前+아빠(appa)；パパ」と「여보(yeobo)」の順で多く使われていた。40代では夫は妻をほとんど「여보(yeobo)」で呼んでいて、妻は「子供の名前+아빠(appa)」と「여보(yeobo)」が同じ頻度で使っていた。そして50代と60代の場合は、夫も妻も特に呼称を使わないという人が一番多く、呼称を使っている人の中では夫と妻ともに「여보(yeobo)」で相手を呼び、他の呼称は見られない傾向がある。

次に韓先熙は「夫をどう呼ぶか」(1994)においてソウル首都圏に住む主婦122人を対象に調査し、「妻をどう呼ぶか」(1996)においてソウル首都圏に住む男性106人を対象に調べた。まず妻が夫を呼ぶ時に一番多く使われる表現を年齢別にみると20代だけは「자기(jagi)」が一番多いが、30代以上は「여보(yeobo)」の使用率が一番高くなる。これは夫が妻を呼ぶ時も同じで、20代の夫は自分の妻を「자기(jagi)」で呼んでいる人が一番多く、30代以上は「여보(yeobo)」で呼んでいる人がもっとも多い。

이용덕(1998)は1994年10月から12月まで韓国デグのある大学の学生を対象に、自分の両親などが家庭で使っている夫婦の呼称をアンケート形式で調べた。이용덕によると20代の男性(「어이(eoi)」：目下を呼ぶ語；おい、「야(ya)：呼びかけの意を表す助詞；...よ」と40代の男性(「여이(eoi)」)と60代以上の夫婦を除いて、どの世代の夫婦もお互いを「여보(yeobo)」で呼んでいる人が一番多い。そして60代以上の夫婦は応答語や「おばあちゃん」「おじいちゃん」や「孫の名前+おばあちゃん、おじいちゃん」にあたる呼称の比率が高くなるのが目立つ。

この三つの論文を夫婦間の呼称について比較してみると、「여보(yeobo)」という言葉を男女共によく使っていること以外に共通点がない。이옥련(1987)と韓(1994)だけを見ると、20代の妻が夫を呼ぶ時は主に「자기(jagi)」という言葉で呼ぶと報告されているが、이용덕(1998)の調査ではそれとは違う結果が出ている。이옥련と韓先熙の調査時期の差はかなりあるが、韓先熙と이용덕の調査時期は同じぐらいである。このような結果が出たのは、ソウル付近とデグ付近という地域的要因が影響を与えたと考えられる。しかしながら、ほぼ同一地域を調査対象としている이옥련と韓先熙の結果がすべて同じパターンを表しているわけでもない。したがって、ここでソウルとデグという二つの地域を比較して地域差を言及することに意味があるとはいえない。

また、各論文の調査方法から、結果の信頼性を低める要因がいくつか認め

られる。이옥련はアンケート調査を自分の学生に課題として実施し、이용덕は自分の学生に対して対面調査を行っている。学生が教員に対して、率直に家庭内の状況を答えられるかどうかも考えるべきであろう。韓は調査対象が全て主婦に限られているが、言葉に関わる要因には職業という点もあり、全ての妻が主婦であるわけでもないので、職業や学歴を考慮した調査が行わなければならないだろう。

2.2.2 場面別

韓国の夫婦の呼びかけ表現を場面別に調査した研究には韓先熙（1994, 1996）と홍민표（1999）がある。両研究とも日本の夫婦の呼びかけの場合と同じく、夫婦が二人きりの時と子供の前という二つの場面でお互いをどう呼びあうのかをアンケート調査した。

韓（1994）は前節で紹介した夫婦の年齢別呼びかけ調査の他に場面別の調査も行っているが、調査対象は年齢別調査の場合と同じである。「夫をどう呼ぶか」（1994）ではソウル首都圏に住む主婦 122 人を対象に、「妻をどう呼ぶか」（1996）はソウル首都圏に住む男性 106 人を対象に調査した。韓（1994）によると、二人だけの場合妻が夫を呼ぶ表現は「여보 (yeobo)」が 48.4% で一番多く、次が「子供の名前+ア畔(appa)」で 25.2% であった。一方子供の前で一番多く使われる呼びかけは、「子供の名前+ア畔(appa)」が 46.3%、「여보 (yeobo)」が 41.1% を表し、ほぼ同じ比率であることが分かった。そして韓（1996）の夫が妻を呼ぶ時の調査結果を見ると、二人だけの場合は「여보 (yeobo)」が 50.6% で一番多く使われ、次に「子供の名前+염마 (eomma)」が 24.1% であった。そして夫が妻を呼ぶ時は若干比率の違いはあるが、子供の前でも二人きりの場合と同じく「여보 (yeobo)」が 46.0% で一番多く使われていた。次に「子供の名前+염마 (eomma)」は 32.2% である。

홍민표（1999）も韓国の夫婦の呼びかけを二人だけの場合と子供の前での場合に分けてアンケート調査した。調査対象はソウルとデグ在住の男性 133 名と女性 100 名である。男性の地域の比率はソウル 21.8% とデグ 78.2%、女性の地域比率はソウル 24.0% とデグ 76.0% である。男性の職業は公務員が 36.1% で一番多く、女性は教師が 40.0% で一番多い。홍민표（1999）の調査結果は韓（1994, 1996）とは時間のズレがそれほどないにもかかわらず少し違う様相を表している。

韓（1994）の調査では、妻が夫を呼ぶ時「자기 (jagi)」という表現はほとんど使われていなかった。ところが、홍민표（1999）の妻が夫を呼ぶ時の結

果を見ると、二人だけの場合「여보 (yeobo)」と「자기 (jagi)」がそれぞれ 27.3%で一番多く使われている。「子供の名前+아빠 (appa)」による呼びかけは 22.2%である。子供の前では、「子供の名前+아빠 (appa)」が 41.0%で一番多く、「여보 (yeobo)」が 27.0%でその次である。しかし「자기 (jagi)」は 9.0%でその使用率が大幅に減っている。一方夫が妻を呼ぶ時の Hong (1999) の結果を見ても、韓 (1994, 1996) の結果とは少し違う。韓 (1994, 1996) は夫の場合、二人だけであれ子供の前であれ妻を呼ぶ時は「여보 (yeobo)」が一番多く使われているという結果が出ている。ところが、Hong (1999) の結果では二人きりの時は「여보 (yeobo)」(27.7%) であるが、子供の前では「子供の名前+엄마 (eomma)」と「여보 (yeobo)」がそれぞれ 28.2%で一番多い使用率を表している。

韓 (1994, 1996) と Hong (1999) の結果のズレの原因を調査対象から推測してみると、明らかに違うのは女性の職業である。韓 (1994) は全て主婦を対象に調査を行っているが、Hong (1999) では主婦の比率は 21.0%に過ぎない。言い換えれば、夫婦間の呼びかけは職業によって影響を受けている可能性がある。ところが、韓 (1994, 1996) と Hong (1999) は調査対象の職業については全く考慮していない。

3. 結論

3.1 先行研究の限界

先行研究の限界は調査方法及び調査結果のまとめ方にあると考えられる。今までの先行研究はほとんどアンケート調査という方法を採用しているが、アンケートという方法は夫婦間の呼称を調べるのに適切であろうか。アンケートから得られた結果が現実を反映しているかどうかは検討の余地がある。アンケート法は精密な統計分析を行うことが可能であるなどの長所がある反面、得られたデータは自然談話ではないので、この結果を変異の実態とするのには問題がある²。むしろ変異に関する話者の意識と考えたほうがいい。

そして、そのアンケート調査においても、言葉の変種に関わる社会的（出身地・居住地・職業・学歴・階層・地位など）や心理的（性格・その場での心理的状態など）要素が考慮されていない。実際にアンケート対象者の居住

² ダニエル・ロング／中井精一／宮治弘明 編『応用社会言語学を学ぶ人のために』（世界思想社, 2001）を参照（とくに、pp. 125-126）。

地や職業が異なるため、本稿で取り上げた各先行研究は、その結果も当然のことながら異なる。ある特定の地域に住む人達やある特定の職業を持つている人達を対象に調査して得られた結果をもって、日本全体または韓国全体の傾向であると断言するのは無理があろう。

調査結果のまとめ方においても、理解しがたい点がある。日本語と韓国語両方とも夫婦間の呼びかけ表現のバリエーションが多様であるため、ほとんどの先行研究が呼びかけ表現の種類を単純に「親族名詞」や「名前系」や「応答詞」などに分類している。しかし、バリエーションが多様であるからこそ、このような単純な区分はできないのではないか。例えば、同じ親族名詞でも「お父さん」「お父ちゃん」「父さん」「父ちゃん」「パパ」はどれも少しニュアンスが違う。名前も「さん」をつけるか「ちゃん」をつけるか、呼び捨てをするかによって違って、応答詞の「おい」と「ねえ」にはそれぞれ違うニュアンスが含まれている。

3.2 今後の研究課題

今までの先行研究はどちらかというと、夫婦間の直接的呼びかけ表現よりも他者に対して配偶者を言及する時の呼び方に着目した研究が多かった。夫婦間の呼びかけの研究は本論で取り上げた少数例しかなく、その用語や研究方法においてもまとまったものはない。しかし、本論でもふれたように米田（1986）は、口論中の日本の夫婦間の呼びかけを調査したが、その結果は普段の呼びかけ表現とは違った結果となった。これは場面によって変わる話し手の心理的状況が呼びかけにどう反映されるのか、その変化の可能性を調査したものと言える。話し手の心理的状況によって相手の態度が変わるなら、呼びかけも当然変わるはずである。このような視点から今後さらに、口論中だけでなく様々な異なる場面で夫婦間の呼びかけの変化を調査することが必要であろう。

今後は、先行研究では不十分であった社会的・心理的要素を基本的に考慮した上での実態調査が求められる。特に夫婦間の呼びかけの歴史的变化や場面的変化に着目して日・韓の呼びかけ表現を比べる際に、その背景として現代の日本社会と韓国社会の夫婦関係の異同を考慮する必要がある。このような研究によって得られた成果は、日本人と韓国人の夫婦間以外の一般的な呼称にもあてはまるかどうか検討していく必要がある。こうした方向での調査は日韓両国の相互コミュニケーション行動分析の基礎となりうるはずだ。

文献

- ・ 韓 先熙 (1994) 「韓国では夫をどう呼ぶか 一日本語との対照を交えてー」『ことば』15, 70-88, 現代日本語研究会.
- ・ 韓 先熙 (1996) 「韓日両国における呼称対照研究 一夫が妻を呼ぶ時ー」『語文学研究』4, 579-605, 祥明女子大学校語文学研究所.
- ・ 米田正人(1986)「夫婦の呼方」『言語生活』7, 18-21, 筑摩書房.
- ・ 홍민표 [Hong-Minpyo] (1999) 「한·일부부호칭의 대조언어학적연구」『일본학보』43, 301-317, 한국 일본학회.
- ・ 이용덕 [Yi-Yongduk] (1998) 「한일 양언어에 있어서의 배우자 호칭에 관한 연구」『일본학보』40, 93-106, 한국 일본학회.
- ・ 이옥련 [Yi-Ockryeon] (1987) 「국어부부호칭의 사회언어학적 고찰」『아세 아여성연구』26, 193-213, 숙명여자대학교.